

北欧の地名

——Københavnの意味——

八 亀 五三男

I はじめに

地名はその国の、その都市の、その町の歴史、文化、宗教、社会、政治、自然など多くの特徴を象徴的に表現するアイコンのようなものと言える。例えば、名古屋市千種区に「古井ノ坂」という交差点があるが、名古屋の中心街栄から飯田街道沿いに南東に進むと少し上り坂になり、その最高地点にこの名が付けられている。また、「古井」は近くにある高牟神社の湧水に因んでいると言われている。昔は、あちこちから水が湧き出ていたらしい。仮に行政区画整理などでこの名前が消えてしまうと、この町の過去の歴史が消滅することになる。これは是非とも避けるべきである。

さて、ヨーロッパの場合は、どのような特徴を持っているであろうか。手元にあるコペンハーゲン（デンマークの首都）の電話帳¹⁾を見てみると、多様な住所を見つけることができる。そのいくつかをここに示したいと思う。

デンマークで最もポピュラーな名前を持つ男性Erik Hansen氏の場合、この電話帳では、

Hansen Erik Ægirsg. 74 01-83 49 44

と書かれている。Ægirsg. 74とは「Ægirsgade通り74番」（-g.=-gade）のことであり、その後電話番号が記載されている。このような具体例を探していくと、いくつかの典型的なパターンが見えてくる。

- (1) Nørregade, Trondhjemsgade, Ægirsgade, Vesterbrogade, Ny Kongensgade, Telemarksgade, Valdemarsgade, Thorsgade, ...
- (2) Yderlandsvej, Roskildevej, Strandvej, Brudelysvej, Nordmarksvej, Hvidovrevej, Sæbjørnsvej, Nordfeldsvej, Grønjordsvej, ...
- (3) Dagmarsallé, Bogholdersallé, Mosseallé, Lindeallé, Maldenallé, Frøbelsallé, Christoffersallé, Brandholmsallé, ...

など数えきれない種類の住所が見出されるが、(1), (2), (3) の語末は以下のようにになっている：

- (1) -gade [street]²⁾
- (2) -vej [road, way]
- (3) -allé [avenue]³⁾

これらの地名の最後の構成要素は「通り、道（路）、並木道」などを表している。

デンマーク（コペンハーゲン）ではいくら短くても、いくら細くても、通りには原則必ず名前が付けられており、その通り名に番号を付加することによって、住所を表示することが行政区画上の特徴となっている（市内の有名な古書店 *Lynge & Søn* の住所は *Silkegade 11 DK 1113 København K* である）。それゆえ、コペンハーゲンでタクシーに乗って行き先を指示する場合、日本のように「～ビルの前」というのではなく、「～通り～番」という言い方をする。通り名が地名となっているのは、広い意味でこの国の文化を象徴する現象と言える。

本稿では、北歐特にデンマーク、アイスランドにおいてどのような地名が多く見出されるのか、そこにはどのような特徴が観察できるのか、文法的な視点を考慮に入れて考えていきたいと思う。

II デンマークの地名

A. Houkon は「地名から何を学び取ることができるか」の答えとして、文化史的、宗教史的、言語史的（通時的音韻変化）などを列記しているのであるが⁴⁾、ここではデンマークでよく見られる地名の第二要素の中で、主に自然、地形などを表すものを観察したいと思う⁵⁾。

ager [field]……Broager, Guldager, Hasselager, Nørager, Roager, ...
 bjerg [mountain, hill]……Daugbjerg, Flakkebjerg, Krejbjerg, Lisbjerg, Solbjerg, ...
 borg [castle, stronghold]……Elsborg, Hornborg, Møborg, Skjoldborg, Tjæreborg, ...
 dal [valley]……Arndal, Bredal, Fårdal, Kompedal, Torndal, ...
 gård [(farm) yard, farm, estate, house]……Davgård, Gårdbogård, Kurgård, Nygård, Storgård, ...
 holm [islet]……Borsholm, Clausholm, Hagsholm, Lydersholm, Trudsholm, ...⁶⁾
 mark [field, patch]……Bjernermark, Himmarn, Kongsmark, Pebersmark, Sundsmark, ...⁷⁾
 ø [island, isle]……Agerø, Lundø, Præstø, Kalvø, Reersø, ...
 å [river, stream]……Fladså, Kongeå, Kruså, Nivå, Suså, ...

これらの地名は、野（原）、山、谷、島、川などデンマークあるいは北歐の地形を象徴的に示している重要なものと言える。また、現在のデンマーク語では通常の語彙としてはもはや使われず地名だけに残っている -holt [wood] がある（*Bomholt, Ersholt, Lindholt, Rønsholt, Tiselholt, ..*）。これは古ノルド語や古デンマーク語では普通名詞 *holt* として使われていた。

もう一つ注意すべき地名がある。それは現在使われていない古デンマーク語の *thorp* という語

である。古ノルド語、アイスランド語では普通名詞þorp [village] であって、それがデンマークでは第2要素 (-rup) として以下のような地名にその名残をとどめている：Dallerup, Fårup, Kullerup, Sejrup, Vejrup, ...。Thorpは時を経ることによって種々の方言においていろんな形へと変化していき、現在では次のような語形で残っている：-rup, -trup, -drup, -terp など⁸⁾。

この4つの語形のthorpとの関係は以下のようにまとめられる：

- (1) -terp …… o : e の母音交替
- (2) -trup, -drup …… 母音—子音→子音—母音への音位転換, o→u への変化
- (3) -rup …… (2) の現象, 歯音の脱落⁹⁾

-rupは3種類の変化をこうむり、元の形thorpと比べると小さくなりかつ地名の一部になってしまっていて目立たないが、それでもなお確実に生き続けている。

F. Fridellによれば、中世のこの地名要素は北欧では特にデンマーク、南スウェーデン、ノルウェー南東部に多く使われている¹⁰⁾。しかしこれは本来のゲルマン語語彙であるので、アイスランド、デンマーク以外に、ドイツにもDorfとして、またイギリスでは古語thorpとして地名の中で、脈々と生き続けている¹¹⁾。

III アイスランドの地名

デンマーク語は一部の品詞を除いて格変化は消失しており、地名の語構成に、言い換えると文法的に、それほど神経質になる必要はない。しかし、アイスランド語は厳密に格変化を維持している言語なので、地名という固有名詞においてさえもその語構成には十分な注意を払わなければならない。

古ノルド語（古アイスランド語）、アイスランド語、デンマーク語、英語を比較することによって、以下にアイスランド語格変化の複雑さを明確にしたいと思う。「強いヴァイキング」を意味する4言語の「形容詞＋名詞」の修飾表現にそれが見られる¹²⁾：

古ノルド語（古アイスランド語）

	単数	複数
主格	sterkr víkingr	sterkir víkingar
属格	sterks víkinga	sterkra víkinga
与格	sterkum víkingi	sterkum víkingum
対格	sterkan víking	sterka víkinga

アイスランド語

主格	sterkur víkingur	sterkir víkingar
属格	sterks víkinga	sterkra víkinga

与格	sterkum víkingi	sterkum víkingum
対格	sterkan víking	sterka víkinga

デンマーク語

(主)	stærk viking	stærke vikinger	
(属)	(af) stærk viking	(af) stærke vikinger	(af=E. of)
(与)	(til) stærk viking	(til) stærke vikinger	(til=E. to)
(対)	stærk viking	stærke vikinger	

英語

(主)	strong Viking	strong Vikings
(属)	(of) strong Viking	(of) strong Vikings
(与)	(to) strong Viking	(to) strong Vikings
(対)	strong Viking	strong Vikings

古ノルド語とアイスランド語の相違は、単数主格の格語尾が-rか-urかの部分だけで、これは通時的に文法的に有意義な変化が生じたというより正書法の問題と考えればよい。単数主格の屈折語尾-rは両言語において確実に維持されている。デンマーク語と英語の属格と与格については、格変化がないので前置詞af, of, til, toでその意味を示してある。

他の印欧語と比較すると名詞、形容詞類における文法的変化〔屈折語尾〕が極端に消滅した英語においては、数〔単数、複数〕と格〔主格、属格、与格、対格〕で語形が異なっているのは、名詞の単数・複数のViking/Vikings、すなわち複数語尾の-sの有無だけである。形容詞には何の相違もない。デ語の場合は、英語と同じように複数形に複数語尾(-er)が付くが、それ以外に形容詞に相違が見られる(複数形に-eが付け加えられている)。

古ノルド語、アイスランド語の場合、形容詞と名詞については、単数・複数の与格、複数の属格・対格は同一であるが、残りの諸形式はすべて異なっている。また、仮に数詞1と2を前に持てくるとそれらはすべて相違している:einn, eins, einum, einan/tveir, tveggja, tveim, tvá¹³⁾。デンマーク語、英語ではそれぞれen/to, one/twoと一つの形式だけである。

英語の名詞に格変化はないので、bookという語があっても、それがThe book is ...と主格なのか、The first page of the book is ...と所有格(属格)なのか、I read the book. と目的格(対格)なのか、わからない。英語のbookは「本」という概念であって、文中における文法的機能は備わっていない。

それに対して、格変化を有する言語では、「～は」「～の」「～に」「～を」「～から」「～によって」など、日本語の助詞にあたる意味も含んだ語形のみが存在している。文中での文法的機能を取り去った形式は存在せず、仮にあるとすればそれは「語幹」という概念になる¹⁴⁾。アイスランド語辞典でbók [=E. book] という語を引いたのと、英和辞典でbookを引いたのでは、全く意味が異なる。前者は単数主格の語形を調べたことになり、文法的機能を考慮した時bókとbookと

は違ったものなのである。

実際にアイスランド地名の語構成を分析してみたいと思う。以下はすべて「属格＋主格」構造の地名で、例えば Dalsheiði の場合、「この地名は Dals-heiði と分割することができ、dals は dalur の単数属格であり（意味は [valley, dale]）、heiði は単数主格の語形である（意味は [heath]）」ことを意味している。先程示した、単数属格 sterks víkinga の víkinga が dals と同じ語形である。

「I はじめに」で、コペンハーゲンの電話帳で見出されたいくつかの住所表示を紹介したが、その中に Trondhjemsgade, Thorsgade などの通り名があった。それぞれ、Trondhjem-s-gade, Thor-s-gade と分割できるが、この -s- は dals と同じように単数属格を意味している。古い格変化の名残が今のデンマーク語語彙の中にも散見できるのは、通時的時間経過が持つ厳しさの結果と言える。

アイスランドの地名

- Apa-vatn < api [monkey] + [water, lake]
- Álfs-nes < álfur [elf] + [cape]
- Bessa-staðir < bessi [bear] + [places (< staður)]
- Brautar-holt < braut [course] + [hillock]
- Brekku-vellir < brekka [slope] + [fields (< völlur)]
- Brúar-foss < brú [bridge] + [waterfall]
- Dals-heiði < dalur [valley, dale] + [heath]
- Fells-strönd < fell [hill] + [beach]
- Heljar-gjá < hel [death, realm of the dead] + [ravine, cleft]
- Hænu-vík < hæna [hen] + [small bay, cove, inlet]
- Kefla-vík < kefli [cylinder] + [small bay, cove, inlet]
- Kirkju-bær < kirkja [church] + [farm, town]
- Reykjar-fjörður < reykur [smoke] + [fjord]
- Sands-fjöll < sandur [sand] + [mountains (< fjall)]
- Skógar-strönd < skógur [forest] + [beach]
- Sléttu-heiði < slétta [plain, prairie] + [heath, moor]
- Steins-mýri < steinn [stone] + [swamp]
- Stöðvar-fjörður < stöð [station] + [fjord]
- Tungu-fell < tunga [tongue] + [hill] [第1構成要素単数]
- Tungna-fell < tunga [tongue] + [hill] [第1構成要素複数]
- Vatns-dalur < vatn [water] + [dale] [第1構成要素単数]
- Vatna-skógur < vatn [water] + [forest] [第1構成要素複数]
- Öskju-vatn < askja [caldera] + [water]

第1要素が人名になっている地名も多く観察することができる。デンマーク語の Thorsgade と同じ語構成であるが、アイスランド語の場合は普通名詞と同じ通常の格変化現象である：

Eiríks-jökull < Eiríkur + [glacier]
 Loðmundar-fjörður < Loðmundur + [fjord]
 Ólafs-dalur < Ólafur + [dale]
 Steingríms-fjörður < Steingrímur + [fjord]
 Þorbjarnar-fell < Þorbjörn + [hill]
 Þorvalds-staðir < Þorvaldur + [places]

アイスランドに特徴的な地名として, foss [waterfall], jökull [glacier], reykur [smoke] などを挙げるができる。火山島であるアイスランドには溶岩台地があり氷河があるので多くの滝が見受けられ, そして氷河の存在は Iceland という国名が示す通りである。火山国であると言うことは, 日本と同じように温泉が湧いており, その湯煙が立っていることになる。

第1要素が必ずしも単数になっているとは限らず,

tunga → 属格 単数 tungu : 複数 tungna

vatn → 属格 単数 vatns : 複数 vatna

においては, 単複の対立が Tungu-fell : Tungna-fell, Vatns-dalur : Vatna-skógur に観察することができる。

地名, 人名はともに固有名詞ではあるが, 名詞という点においては普通名詞と何ら相違はないというのが, アイスランド語文法の特徴である。それゆえ, 地名と同様, 人名の場合も普通名詞と同じように変化する。それをアイスランド語特有の「父称」patronymic という現象の中に見ることができる。

あるアイスランド人の言語学者がアイスランド語の文法書を著し, References リストの中に Eiríkur Halldórsson (アイスランド人) の著書を入れたとする。我々がいざ Halldórsson で探そうとすると,

Halldórsson, Eiríkur → Eiríkur Halldórsson

と指示がしてあり, そこで Eiríkur Halldórsson で引くと彼の著書名を見ることができる。これは一体どういうことなのだろうか。

今, Jón Bragason という男性がいて, 結婚後男児が誕生したと仮定する。その子を Árni と命名する。しかし, アイスランドでは苗字がなく父称を用いるので, 個人の名前 Árni の後に文字通り「(父親) Jón の息子」という意味の Jónsson [=son of Jón] を付け, Árni Jónsson となる。彼の名前はあくまで Árni なのである。娘が生まれた場合は, Aldís Jónsdóttir [=Aldís (女性名), daughter of Jón] である。因みに, 当人 Jón Bragason の父親の名前は Bragi [Barga は Bragi の属格形] であることは容易に推測できる。すなわち, 固有名詞も -i で終わる男性 (普通) 名詞と同じように, 以下のように変化を行う (単数) :

主格	hani [cock]	Bragi
属格	hana	Braga
与格	hana	Braga
対格	hana	Braga

Eiríkur Halldórsson の場合、彼の名前は Eiríkur で、父称として son of Halldór が付け加えられている (Halldór-s-son)。

もう一度確認しておきたいが、この章のはじめに sterkur víkingur を「強いヴァイキング」としたが、正しくは「一人の強いヴァイキングが」で単数主格の文法的機能を有しており、それに対応する述部動詞はこれに一致させなければならない。これは固有名詞の場合も同様である。

IV “København” (コペンハーゲン) の意味

「デンマーク」という国名は北欧諸語では以下ようになる：

デ語	Danmark
ス語	Danmark
ノ語	Danmark
ア語	Danmörk
フ語	Danmark

【それぞれデンマーク語、スウェーデン語、ノルウェー語、アイスランド語で、フ語はフェーロー諸島で話されているフェーロー語のことである。この言語は、他の諸言語と同じくノルド語に属し、アイスランド語のように名詞に古い格変化を持っている】

B. Jørgensen は Danmark の意味を “danernes grænseskov” (デーン人達の境界の森) としており、これは彼らが南スレスヴィ (シュレスヴィッヒ) でサクソン人と森で国境を接していたからだと説明している¹⁵⁾。古語、詩語として Daner 「デンマーク人」(複数) が用いられることがあるが (普通は dnskere)、これは古ノルド語の Danir (複数主格) に遡ることができる。この Danir の複数属格が Dana で、それが Danmark (Dan-mark) の第一要素となっていると考えられるのではなかろうか。第二要素の mark は、普通の意味とは少し異なり古くは「境界の森」の意味を持っていたと言われている。Danmark という国名に関しては、この通時的な格変化の痕跡は現在のどのノルド語にも見ることができない。

では、アイスランド、デンマークの首都 Reykjavík, København の場合はどうであろうか。アイスランドの首都はレイキャヴィーク Reykjavík で、これは Reykja-vík と2つの構成要素に分けることができる。より古い形は Reykjar-vík で、前半 reykjar は reykur [smoke, steam] の単数属格、後半 vík [inlet] は単数主格である¹⁶⁾。それゆえ、仮に Reykjar-vík を2つの普通名詞として並置すると、reykjar vík のようにアイスランド語文法規則を順守した2語の連続となり、これは単な

る「属格+主格（名詞）」の修飾関係に過ぎない¹⁷⁾。これらが1語になって Reykjavík (<Reykjarvík) ができ上がっている。

デンマークの首都コペンハーゲンは、デンマーク語で København というのだが、これはそもそもどんな意味を持っているのであろうか。「商業の港」「商人の港」などと説明されるが、まず「商人」が正しい意味である。しかし、数という文法範疇が義務的に存在しない日本語では、この「商人」が単数なのか複数なのか判断ができない。

義務的な文法範疇として数・格を有する言語においては、意味のみを表す中立的な「商人」という概念は存在し得ない。「一人の商人」なのか「複数の商人」なのか、「～は」(主格)・「～の」(属格)・「～に」(与格)・「～を」(対格)なのかは、その語を文中に入れなくても、単語そのものの形で判断できるようになっている。言い換えると、数・格はその語形の中に属性として備わっている、それゆえ、極言すると、語順は関係ないことになる¹⁸⁾。これが格変化のある言語の複雑さと同時に便利さでもある。

havn [harbor, port]¹⁹⁾ を第2構成要素に持つものとして Frederikshavn, Christianshavn などがあるが、これらは「人名+s+havn」という語構成で -s- は属格の標識であると容易に推測できる。では København の場合はどうであろうか。少し詳細に観察したいと思う。

北欧ノルド語で「コペンハーゲン」は以下ようになる：

デ語	København
ス語	Köpenhamn
ノ語	København
ア語	Kaupmannahöfn
フ語	Keypmannahavn

国名 Danmark に比べると、アイスランド語とフェーロー語が他の3言語と異なっており、-havn, -hamn, -höfn を除いた第1構成要素が非常に長い。

標準正書法が完全に確立していなければ、また方言形が存在すれば、いくつかの綴りが存在してもそれは当然の結果と言えよう。特に時間的な経過が起これば、多様性が出てそれは仕方のないことである。V. Dahlerup, J. B. -Nielsen などによると²⁰⁾, København に対して以下のような古デンマーク語時代のより古い語形が挙げられている²¹⁾：

Copmannæhauæn (13世紀半ば)

Kopmanahafn (13世紀半ば) (-mana- の n=nn)²²⁾

Køpmannæhafn (13世紀半ば)

Køpmannehaffn (15世紀半ば)

第1構成要素が現在の Køben- (Køben-havn) ではなく、Køb- の後に -mannV- が入っていることに注意しなければならない (V=æ, a, e)。

「コペンハーゲン」という町については、中世のデンマーク人歴史家Saxo Grammaticusが12世紀にラテン語で書いた歴史書*Gesta Danorum*『デンマーク人の事績』の中で、mercatorum portusと言及したのが最初の記述とされる²³⁾。

mercatorum 複数属格 < mercator [merchant] 単数主格
portus [port, harbour] 単数主格

であるので、これを当時のデンマーク語に翻訳すると、Køpmannæhafnとなる²⁴⁾。hafn (単数主格)はportusである。なお、Ch. B. -Christensenは古デンマーク語の複数属格をkøpmanna (< køpman [merchant] 単数主格)²⁵⁾としており、これがラテン語のmercatorumに対応している。この表記法が次のアイスランド語の語形との比較に役立つ。

上記のように、正書法が確立していない時代にはKøbenhavnは色々な表記のされ方をした。しかし、アイスランド語は現在でも古ノルド語時代の言語変化を保持しており、デンマーク語Københavnはアイスランド語でKaupmannahöfn (=Kaupmanna-höfn)と言う(古デンマーク語køpmanna参照)。

kaupmanna 複数属格 < kaupmaður [merchant] 単数主格
höfn [port] 単数主格

と分析でき、「Ⅲ アイスランドの地名」の書き方に従うと、

Kaupmanna-höfn < kaupmaður [merchant] + [port]

となる。

普通名詞 kaupmaður [merchant] は以下のように格変化を行うが、

	単数	複数
主格	kaupmaður	kaupmenn
属格	kaupmanns	kaupmanna
与格	kaupmanni	kaupmönnum
対格	kaupmann	kaupmenn

この変化表を見るとKaupmannahöfnの第1構成要素のKaupmanna-がアイスランド語普通名詞kaupmaðurの複数属格形であることは一目瞭然である。

アイスランド語Kaupmannahöfnをよく観察すると、デンマーク語Københavnが辿ってきた通時的変遷を明確に理解することができ、その語形の中に隠されている見えない情報を確実に読み解くことができる。Køben-の-n-に-manna-の痕跡がかすかに残っていることを見逃してはならない。

V おわりに

現在使用されている地名が、言語の宿命として、長い時間の試練を受けて発音、綴りが変化してしまっているのは、どこの国でも起こりうる現象と言える。しかし、この変化によって過去の言語的歴史が消えてしまった可能性について真剣に考える必要がある。

過去から現在までの通時的な言語変化があったからこそ現在が存在しているのであり、「過去の総体・集積としての現在」という視点の重要性を痛切に感ずる。愛知県知立市にある知立神社の池にたくさんのコイやフナがいたことから「池鯉鮒」と漢字表記したとするならば、「知立」と書き換えることによって、その歴史は二度と我々の目に触れなくなってしまったと言える。

繰り返しになるかも知れないが、もう一度確認をしたいと思う。

Sandsfjöll という地名は Sands-fjöll と分けることができ、第1要素は普通名詞 sandur [sand] (単数主格) の単数属格 sands, 第2要素は普通名詞 fjall [mountain] (単数主格) の複数主格 fjöll である。この地名の2つの要素が普通名詞として文中に入ったとすると, sands fjöll となり, これは名詞の単数属格が複数主格の名詞を修飾している言語表現である (通常の普通名詞2つの修飾関係)。そして, その複数主格が今度は文全体の中で, 例えば主語になっているという文構造が明確に想定できる。英語の sand mountains とは全く語感が異なっており, アイスランド語の方は形の上で明確に「砂の山々が」という意味を持っている。2つの単語を見ると sand と mountains の文法関係が明確で, 主要語になっている mountains の文中での働きも分かる。英語, デンマーク語ではそれが全く見えてこないが, アイスランド語では sands fjöll だけで Mountains of sand are ... の情報が伝わってくる。Sandsfjöll は, 「砂の山々の」の意味になると複数属格 Sandsfalla に変わる。これが格範疇を持つ言語の複雑さと便利さである。

アイスランド人はこの地名を見た時, 上述した文法関係を瞬間的に読み取っていることになり, 日本人が「砂山」という時とは語構成と意味の認識の仕方が全く異なる。

最後に, アイスランド語 hestur [=E. horse] は『アイスランド語—日本語辞典』では「馬」であり『アイスランド語—英語辞典』では horse となるが, これは厳密にいうと間違っていることを指摘しておきたい。日本語であれば, 「一頭の馬が」と単数主格であることを明示する必要がある。

	単数	複数
主格	hestur	hestar
属格	hests	hesta
与格	hesti	hestum
対格	hest	hesta

この変化表から明らかなように, アイスランド語では「単数主格の hestur」を辞典で引いたこと

になる。

注

- 1) この資料は現地で入手した、コペンハーゲンの一般家庭で普通に使用されている1979年度版の電話帳である(01/02 *Navnebog København*)。
- 2) デンマーク語 *gade* はイギリス York 市にある *Coppergate* という地名にその名残を留めている。アイスランド語では *gata*, ドイツ語では *Gasse* が対応している。
- 3) *allé* はフランス語からの借用語である。
- 4) A. Houkon. *Håndbog*, p. 30。
- 5) A. Houkon. *Håndbog* より。
- 6) スウェーデンの首都 Stockholm にも使用されている。
- 7) 後に述べる国名 Danmark にも使用されている。
- 8) Ch. B. -Christensen. *Nudansk Ordbog*. -torp の項目; B. Jørgensen. *Danske Stednavne*. -torp の項目。
- 9) K. Hald. *Vore Stednavne*. p. 122.
- 10) F. Fridell “The development of Old Nordic place-names” p. 976.
- 11) VC → CV への音位転換 (metathesis) は古英語の *þorp*, *þrop* 両形の存在に見ることもできる。
- 12) 本文の形容詞は強変化をしているが、形容詞の前に定冠詞類が来る場合は弱変化を行う：

	単数	複数
主格	sterki	sterku
属格	sterka	sterku
与格	sterka	sterku
体格	sterka	sterku

- 13) 数詞は1～4まで格変化を行う：

	[3]	[4]
主格	þrír	fjórir
属格	þriggja	fjögurra
与格	þremur	fjórum
対格	þrjá	fjóra

ただし、これは男性名詞に付く変化形なので、女性名詞、中性名詞の場合はまた別の変化を行う。すなわち、それぞれ12通りの変化形が存在することになる。

- 14) 格変化を持つ言語では、「語幹+屈折語尾」で文法機能を持った1つの語形ができて上がっている。

- 15) B. Jørgensen. *Storbyens Stednavne*. p. 58:

mark i den ældre betydning ‘grænseskov’. “Danernes grænseskov” sandsynligvis om grænsen mod saxerne i det sydlige Slesvig.

- 16) Ch. B. -Christensen. *Nudansk Ordbog*: Reykjavík の項目。

- 17) この *vík* は *víking* の中に *vík* + *-ing* として存在している。意味は「湾」+「～に住む者」である。

- 18) やはり格変化が厳密に存在するラテン語の場合、「私はバラに水を与える」は以下の6通りの可能性がある：

1. Rosae aquam do.
2. Rosae do aquam.

3. Aquam rosae do.
4. Aquam do rosae.
5. Do aquam rosae.
6. Do rosae aquam.

rosae は rosa[rose] の単数与格であるので、文中のどの位置にあっても「(一本の)バラに」という意味になる。

- 19) havn については以下を参照：

havn med ordet havn betegnes i stednavne såvel en kunstigt anlagt landingsplads for skibe som en naturskabt mulighed for at søge ly langs kysten. Ordet er ikke noget hyppigt stednavneled, men forekommer dog siden middelalderen som efterled i København, oprindelig blot kaldt Havn, og i Korshavn og Slipshavn. (B. Jørgensen. *Danske Stednavne*. p. 113)

havn は地名としてそれほど頻繁には見られないが、中世以降用いられてきた：København（もともとは Havn のみ）、Korshavn, Slipshavn。

- 20) V. Dahlerup. *Ordbog 11*. p. 1196; J. B. -Nielsen. *Gammeldansk Grammatik II*. p. 334.
- 21) A. Houken は、gammeldansk (= Old Danish) を「1100～1500 年頃」としている (*Håndbog. Forkortelser I*)。
- 22) n=nn を表している。もともとは n は一つだったのが子音重複 (gemination) を起こしたと言われている (J. B. -Nielsen. *Gammeldansk Grammatik III*. p. 136.)。
- 23) V. Dahlerup. *Ordbog 11*. p. 1196; J. B. -Nielsen. *Gammeldansk Grammatik II*. p. 334.
- 24) B. T. Dahl og H. Hammer. *Dansk Ordbog*. p. 549.
- 25) *Nudansk Ordbog*. p. 602.

参考文献

- Becker-Christensen, Christian. *Nudansk Ordbog* (København: Politikens Forlag, 1990)
- Brøndum-Nielsen, Johs. *Gammeldansk Grammatik II, III* (København: J. H. Schultz Forlag, 1935)
- Dahl, B. T. og H. Hammer. *Dansk Ordbog for Folket* (København og Kristiania: Gyldendalske Boghandel og Nordisk Forlag, 1907)
- Dahlerup, Verner. *Ordbog over det Danske Sprog Vol. 11* (København: Gyldendal, 1976)
- Fridell, Staffan “The development of Old Nordic place-names” in Oskar Bandle (ed.) *The Nordic Languages Vol. 1*. (Berlin/ New York: Walter de Gruyter. 2002)
- Hald, Kristian. *Vore Stednavne* (København: GEC Gads Forlag, 1965)
- Houken, Aage. *Håndbog i danske stednavne* (København: Gyldendal, 1976)
- Jensen, Gillian Fellows. *Scandinavian Settlement Names in Yorkshire* (Copenhagen: Akademisk Forlag, 1972)
- Jørgensen, Bent. *Storbyens Stednavne* (København: Gyldendal, 1999)
- *Danske Stednavne* (København: Gyldendal, 2008)
- Nielsen, Niels Åge. *Dansk Etymologisk Ordbog* (København: Gyldendal, 2008)
- Skarði, Jóhannes Av. *Donsk-Føroysk Orðabók* (Tórshavn: Føroya Fróðskaparfelag, 1977)
- Tatsuro, Asai & Morita Sadao. *Aisurando Chimei-Shojiten* (Tokyo: Teikoku-Shoin, 1980)
- 01/02 *Navnebog København* (København: ktas, 1979)